

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 430 回 「地デジ化」新時代とテレビ離れ

2011.7.31

テレビプロデューサーの**澤本泰之氏** (株式会社ライズプランニング;代表取締役)と会食した。当然話題はテレビの話である。(同社:<http://www.riseplanning.co.jp/company-info.html>)

小生殆んどテレビを見なくなった。見るとしたら情報番組を録画して、早送りの「まとめ見」である。NHKと、なぜかテレ東ばかり、これも視聴率にカウントされるのだろうか？

つい先月(2011.6.15)、テレビ朝日の藤井ゼネラルプロデューサーは、ツイッターで「**ついに昨日、19時台の民放は全局、視聴率が1ケタになった**(関東地区)」と呟いた。この呟きがネットで大きな反響を呼んで、「正直、見たい番組がない、TV 本当にもういないかも…」などと「当然」と受けとめるリツイートが大量に寄せられた。そして今月、TBS系の国民的時代劇「**水戸黄門**」が、現在放送している第 43 部で終了することが発表された。「この紋所が目に入らぬか！」などの名せりふで親しまれてきた人気番組は、40 年余りの歴史に幕を下ろすことになった。第1部が始まったのは1969年で、還暦の小生が18歳の時である。放送回数は既に1,200回を超えている。1979年2月5日放送の第9部最終回で43.7%(ビデオリサーチ調べ、関東地区)という最高視聴率を記録したが、最近では10%前後と視聴率が低迷していた。

少し古いデータだが、**BPO**(放送倫理・番組向上機構)は2009年10月、報告書「“デジタルネイティブ”はテレビをどう見ているか? ~番組視聴実態 300人調査」を公式ウェブ上に掲載した。(出典:<http://www.bpo.gr.jp/youth/research/index.html>)

その中で、テレビの将来について「**2020年にはどうなっているか**」と言う問いがある。「テレビが無いと困る...18%」「2020年にはテレビは今ほどは見られなくなる...50.0%」となり、テレビに対する肯定感が非常に低いことが分かる。テレビ側から見れば、「パソコン(インターネット)はテレビにとって邪魔な存在だ」と考えるのも無理は無いかもしれない。ただ全体として、(若年層においてだが)「ほぼ半数の人が「テレビなど無くても困らない(あった方がマシ、という程度)」と考えている事実は、深く受け止めるべきだろう。

このような予見があるにもかかわらず、業界のエリート達は一体何をやってきたのだろうか？ 恐らくテレビ会社の社長は、自局の番組を見ていないだろう。常識的日本人だったら、まともに見られるはずがない。敢えて弁解しておく。冒頭の澤本泰之氏は、決してこの類ではない。むしろこの傾向を嘆き、良質な番組づくりに邁進している。

たくさんの娯楽の中から垂れ流しのテレビの時代は、世代交代と共に消えていく。**ジャニーズ事務所**と**吉本**に毒されたテレビ制作は、毎日、下らないバラエティ、学芸会並みのイケメン坊やのドラマ、誰の常識かもわからないクイズ、韓国特集、そしてテレビショッピング、その合間に流れるパチンコ台のCMばかり...こうしたことで視聴者離れが進み、まともなスポンサーがテレビから撤退していく。そして、益々悪循環へと陥るわけだ。**地デジ化を迎えたテレビ新時代**、このままでは、せっかくのチャンスも泡となりそうである。これからのテレビのあり方を...猛省すべき、業界人！！とおきたい。